

松山利夫著 山村の文化地理学的研究——日本における山村文化の生態と地域の構造——

古今書院 1986年9月

A5判 362ページ 6,500円

本書は次の3編に分けられた計10章と、序・終章によって構成され、さらに英文の附論が付されている。

序章 山村文化研究の枠組み (pp. 15~22)

第I編：雑穀栽培地帯における伝統的稲作の技術 (pp. 23~74)

第1章 台湾アミ族の水田稲作

第2章 与那国島の水田稲作

第II編：山村文化の解析 (pp. 75~281)

第1章 山村のプロト・タイプ

第2章 近・現代山村における資源の開発 その一 近代飛驒の場合

第3章 近・現代山村における資源の開発 その二 白山麓

第4章 近・現代山村における資源の開発 その三 南越山地

第5章 山地住民の世帯経済

第6章 生業の変遷と物質文化の変容

第III編：東アジアの基層文化と山村 (pp. 283~325)

第1章 東アジアの基層文化

第2章 濟州島の畑作農耕文化

終章 残された課題と問題解決の方法 (pp. 327~332)

序章では、まず本書における山村文化研究の枠組みが設定されている。その観点として次の3つがあげられている。

①山村には山地の生態系がもつ資源の採取利用を基調とする経済体系が存在し、わが国の山村は落葉広葉樹林と照葉樹林の二つの生態系に想定される基層文化に組み込まれている。

②山村文化は、非稲作・焼畑を基調とする文化であるが、山村ではその文化的特性を保持しつつも、水田稲作の導入を試み、さもなくば米の購入を模索しつつげた。

③山村のプロトタイプを、狩猟・漁撈・採集、焼畑を主とする農耕、木器や木羽の製作などきわめて広いスペクトラムをもつサブシステム・エコノミ

ーを有するものとしてとらえ、山村文化の変容を経済システム・物質文化の変容と景観の変遷として把握する。

第I編では、かつての焼畑農耕民が水田稲作農民化した典型的な事例として台湾アミ族の水田稲作と、雑穀栽培を基調にもつと共に中国江南地方・東南アジアと日本列島における水田稲作の展開の要と目される与那国島の水田稲作とを、技術を軸に検討する。

第II編では、まず新潟・長野両県にまたがる秋山郷について、鈴木牧之『秋山紀行』が伝える経済生活が、序章において設定した山村のプロトタイプにきわめて近似することを示し、さらに山村居住者の「農民的狩猟・採集」とその特性について分析し、序章で述べた「広いスペクトラムをもつサブシステム・エコノミー」の具体的説明をする。ついで、近・現代山村における資源開発・技術と山村経済について、飛驒、白山麓、南越山地をとりあげ、現地調査のみならず『斐太後風土記』の分析なども加えた丹念な事例報告がなされている。さらに、秋田マタギおよび白山麓の焼畑耕作の事例について検討を加え、風嵐集落については生業の変遷と物質文化の変容について追跡する。

第III編では、視点を変えて、日本の山村に特徴的な文化要素を東アジアの「ナラ林文化」ならびに「照葉樹林文化」という2つの「農耕文化」の系譜の中で考えてみようとする。また、この2つの基層文化のいわば交点をなす位置にある濟州島の山村の事例を検討し、この島の基層をなす農耕文化が、非稲作・雑穀農耕にあるとする。

終章では、残された問題に関する著者の研究姿勢と方向が示されている。

附論は、堅果類の特集・加工について著者の既往論文の集成・要約的な内容を有する。

本書はおおよそ以上のような内容と構成を有するが、第I編は序章で提示された3つの観点のうち的主として②に対応し、同様に第II編は③に、第III編は①に対応する部分が多い。

本書の中心は、量的にも全体の6割ほどを占める第II編にあるとみられ、そこで展開された山村の「広いスペクトラムをもつサブシステム・エコノミー」の多角的検討は、本書の最も大きな収穫であり、極めて重要な視点でもある。しかも「山地の生態学が

もつ資源の採取利用を基調とする経済体系」を有する山村のプロトタイプを構成し、その変容のプロセスとして山村を把握した上で分析を加え、さらにその基層を掘り起こして東アジアの基層文化の流れの中に位置付けようという壮大な構想を有する。非稲作・焼畑を基調とした山村が水田稲作の導入ないし米の購入に転じるプロセスもまた、この文脈の中で検討されている。

本書は、タイトルにも明確に表現されているように、「文化地理学的研究」の書であって、歴史地理学的であるかどうかという意識が著者にあったとは思われないし、またその必要もない。ただし、本書の紹介が本誌にとって意味があるとすれば、本書の山村文化の把握が極めて動的であることであり、歴史地理学的にみても大きな成果とみられる点である。もちろん、さまざまな調査によって知り得る山村の実情のすべてを、プロトタイプからの変容、ないし典型的山村文化の崩壊のプロセスに位置付ける手法が、歴史地理学的に常に有意義であるとはいえない。しかし、本書が雑弁に物語っているように、極めて有効な視角である。

本書を通読して感じたことを一、二付言しておきたい。一つは、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ編の構成が本書の目的にとって最上であったのかどうか、という点である。例えば、第Ⅱ編の内容のあとに、第Ⅰ編の内容が展開される方が（この場合にはおそらく第Ⅱ編の内容の一部が第Ⅰ編の内容の後にくることになる）、紹介者には理解が容易であるように思えた。

また、全くの末節に属することであるが、用語の表記法も、カタカナとアルファベットが並記されているのが目立つ章、カタカナだけの章、アルファベットだけの章などがあって、再版の折には統一していただけると有難い。

以上、この方面の研究には全く不案内な紹介者が、皮相なことを述べたに過ぎず、本書の全貌を紹介しきれしていないことを御許しいただきたい。

いずれにしろ、本書によって文化地理学は新たに一つの豊かな内容を得たことになる。

(金田章裕)

Parker, G.: Western Geopolitical Thought in the Twentieth Century (『今世紀欧米における地政学思想』), 199 p., 1985, Croom Helm, £19. 95.

周知のように、19世紀末から20世紀にかけて欧米および日本で地理学が専門職業化するに当たっては、ナショナリズムないし植民地主義の風潮が大きく関わっていた。その意味では、地政学は近代地理学の一つの極限形態といえる。したがってそれを分析することは、地理学史学において格別の意義を有するはずである。これは直接の地政学批判とは別次元の問題であり、地理学や全体社会にとって地政学がいかなる存在であったかについて広い視野から位置づけるような接近法が必要であろう。著者がいかなる問題意識に基づいてこの研究を行ったかは記されていない。しかし、広汎な「地政学的」見解を陳列し社会的な文脈との相互の影響を跡付けようとした本書は、上記のような接近法に対しても一つの礎石となるであろう。

著者は、政治地理学・地政学を次のように性格づける。すなわち政治地理学は、政治的・国際的権力（以下では‘power’を「権力」と訳す）を、世界の物理的性格に堅く根ざしたものとして研究する。地政学は、かかる権力の国際的舞台を、空間的視点から、地球を全体として理解することを試みる学問である。その構成要素（国家など）を検討することもあるが、それはあくまで全体を理解するためであり、要素の結合によって生まれる全体的パターンと構造とが地政学的研究の主関心をなす（したがって地政学と政治地理学との関係は、全地球的気象システムを理解しようとする気候学と気象学との関係に相似的といえる）。

以上の定義から当然に、地政学は、欧米列強が植民地を拡大したことによって世界が有限の閉鎖システムとなり、その結果地球が一つの全体として認識されうようになった19世紀末以降の存在である。そのとき以来、地政学は国際政治の状況の変化に応じて変化してきた。本書では、このような流れの中における様々な地政学思想を時代順・地域別に検討し、また、これらの思想が現実の政治にどの様に影響したかについても論ずる。

本書の構成は以下の通りである。

- 第1章：序
- 第2章：20世紀地政学思想の根
- 第3章：Mackinder とその世界論
- 第4章：Mackinder の理論以後の世界論
- 第5章：ドイツ地政学とその先駆者
- 第6章：第二次大戦以前のフランス地政学思想